

---

# The fruit of their LOVE

銀水晶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The fruit of their LOVE

### 【Nコード】

N2744E

### 【作者名】

銀水晶

### 【あらすじ】

彼女にフラれた俺に高校の時に仲の良かった女の子が…

「ごめんなさい・・・」

冬の寒い夜。雪の降る中、俺、葛城武は誰の目から見ても完璧と言えるほど見事にフラれた。

本気で好きになって告白し、付き合い始めて3ヶ月・・・あまりにも突然の別れだった。

事の発端は昨日・・・

高校時代に仲の良かった女の子と久しぶりに会い、食事をした所から始まる。

「しばらく見なかったけど有希だってすぐわかったよ。」

「私も武くんだってすぐわかった。」

駅の近くの喫茶店に入り2年ぶりの再会に少し驚いた俺。

彼女は、有希は昔と何も変わらずに窓側の席に1人で座っていた。

「有希？斉藤有希さんだよね？」

「武くん？」

「やっぱり！！」

有希じゃん！すげえ久しぶりだな！！」

「それはこっちの台詞だよ、高校卒業したら連絡取れなくなっちゃうし。」

「いやあ、携帯壊しちゃってメモリーが無くなっちゃって。」  
2年ぶりの再会だったという事もあり2人は昔の話で盛り上がった。  
いた。

カランカラン

「武・・・」

「美姫・・・」

俺が彼女の名前を言い終わるのとほぼ同時に彼女が凄い勢いで喫茶店を出ていった。

有希を残して後を追ったが追いつく事は出来なかった。

「美姫・・・」

その日は彼女と連絡さえ取れなかった。

そして今に至る。

こういう時の携帯の音楽はなぜか無性に腹が立つ。

「もしもし・・・」

「武くん？昨日はごめんね、なんか私のせいで彼女さんに変な誤解をさせちゃって・・・」

「有希か、いいんだ。たった今フラれた所だから。」

「フラれたの?!」

本当にごめんなさい。いくら謝っても許してもらえないだろうけど、本当にごめんなさい。」

「大丈夫だよ、こんな事で落ち込むほど弱くないから。それより今から会えないか?」

今は誰でもいいから知り合いの顔が見たかった。

「…うん、じゃあ昨日の喫茶店にいるから…。」

「わかった。」

カランカラン

「ごめん、急に会いたいなんて」

「ううん、私も直接会って謝りたかったから。本当にごめんなさい。」

「いって、そんなに謝られると俺が悪い事したみたいだから。」

「でも…」

「それよりどっか行かないか? 久しぶりに会ったんだから。」

とりあえず街を歩く2人

この店、美姫が欲しい服があるって言ってたな  
こっちのゲーセンは美姫が欲しいって言って3000円も使って又  
イグルミ取ったっけ…  
忘れる為に有希と街を歩いてるのに次から次へと美姫との思い出が  
甦る。

「…くん！武くん！！」

「あつ、ごめん。」

少しボーツとしちゃって…」

「どうしたの？大丈夫？」

「ちょっと美姫との思い出が…」

涙ぐむ俺

「…ごめんなさい。」

「だから、そんなに何回も謝るなって。別に有希は悪くないよ。」

「そんな事言っても…」

「あつ！カラオケ行こう？  
今無性に歌いたいんだよね。」

高校時代、軽音部でヴォーカルをしていた俺はそれなりに歌に自信  
があった。

「武くんが行きたいならいいけど…」

近くのカラオケ店に入り速攻で入れたのはラブソングだった。  
歌いながら泣いてるのに気付いた…

「武くん、泣いてる…」

有希の少しかすれた声が聞こえた。

「別に…」

歌の途中で演奏停止を押した。

「本気で好きだったんだね、彼女の事…」

「ああ、多分誰よりも美姫を愛してた。」

「私じゃ代わりになれない？」

「えっ？」

「私、高校の時から武くんの事大好きだったんだよ！！  
昨日会えた時本当に嬉しかった。」

「有希…」

彼女の目から涙がこぼれ落ちた。

「今の武くんにこんな事言うのもひどいけど、私じゃ代わりになれ

ない？

私でいいんならなんでもするから!!」

高校時代、1度も泣いた事のない有希。

卒業式だつて泣かなかった。

そんな彼女が今、俺の目の前で泣いている、こんな俺を好きだと言つてくれている。

でも…

「ごめん、今はまだ誰とも付き合つ気にはなれない…

俺も有希の事は好きだけど、まだ…」

「ごめんね…

私、凄く自分勝手だった。

武くんの哀しみも知らないで…」

「いや、でも嬉しいよ、そう言ってもらえて…」

「こんな人の痛みもわかんないような私だけどまた遊んでもらえる？」

「ああ、連絡するよ。」

まだ時間はあつたがカラオケを出る2人。  
帰り道はお互い何も話せなかった。

「じゃあ私こつちだから…」

「送つてくよ。」



「うっん、1人で帰れるから。  
また連絡して。」

「そう…、じゃあまた今度…」

「ばいばい」

有希の言っただいばいの一言がなにか悲しげだった。

翌日

「大好きだったんだよ!!」

昨日の有希の言葉が頭の中に残ってる。

有希の気持ちには高校の時に少し気付いていた。ただ高校時代の俺は少し恥ずかしくて気付かないふりをしていた。

「有希…」

俺は電話をかけた。

「もしもし？」

「有希？この前の喫茶店にいるから!!」

相手の用事があるのかも聞かないで電話を切り喫茶店に急いだ。

「武くん。」

有希は俺が着いてから30分くらいしてから店に来た。

「ごめん、急に呼び出して。」

どうしても有希に言いたい事があるんだ。

「

「なに？私に言いたい事？」

「行こう。」

有希の手を引いて喫茶店を出る俺

「何？急にどうしたの？」

驚いた顔をする有希

俺は何も言わずに有希を引っ張る。

着いたのは人気のない小さな公園。

「有希、聞いて。」

俺は有希の事が好きだ。でも今付き合ったら有希と美姫をかぶらせるかもしれない、それでも俺を好きだって言ってくれるか？」

昨日の夜、ずっと考えてまとめた答えだった。

俺は美姫を愛してた、でも、有希に会った時、一瞬だけ美姫の事を忘れてしまった。

そんな自分が許せない。でもフラれた後に一番に連絡をしてきて慰めてくれた。

こんな俺を好きだって言ってくれた。

そんな有希を傷つける事が今は許せないと思った。

「有希？」

下を向いたまま固まっている有希

「私が美姫さんの代わりでもいい、それで武くんが救われるなら。でも、そのうちでいいから、いつでもいいから私を私として見てくれる？」

「ああ、約束する」

「いつまでも待ってるから。」

「有……」

誰もいない公園で唇を重ねる。

今は美姫の、元力ノの事は考えない。

有希の事だけを考える。

この先、どんな未来が来ても有希を守り抜く。

有希と会った日と同じ雪が降る寒い夜の事だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2744e/>

---

The fruit of their LOVE

2011年1月28日10時39分発行